

初春二題

「週末寸言」原稿 20100109

年の瀬の一夜、秋の叙勲でその榮譽に浴した友人の祝賀会に出かけていった。あいにく前後の日程が合わず会場となった新宿のホテルに着いたときにはまだ随分と間があった。ロビーで時間をつぶすのも味気ないので夕闇迫る隣接の公園に行ってみた。薄暗がりの中にうっそうと茂る林間の小道はここが年の瀬の、しかも大都会のど真ん中とは思えない静寂に包まれていた。しかし、ここかしこの樹間には青色テントがひしめいて、この国の現実が病膏育に達しているのがよく分かる。だが、テントの中に人のいる気配が無い。どうしたのだろうと思いながら小径をなお辿って行くと、広場に大勢の人々が固まっついていてどうやら食事をとっているらしい。後でたずねてみるとこの日は何日かに一度のボランティアによる炊き出しの日だったという。

あのテント村の住人たち、この厳寒の初春をどう寿いでいるのかしら。「薦を着て誰人います花の春」(芭蕉)。

一句は、芭蕉の人生で最も創作意欲の充実していた元禄3年(1690)の「歳旦句」である。「薦」を着た人々は乞食であり、現代用語ではホームレスである。「花の春」を寿ぐには実にふさわしからざる登場人物達である。芭蕉は、前年の年末を京都で過ごしていて、元禄不況の中で多数のホームレスを見ていた。そしてその目線の先には尊敬してやまない偉大な乞食・西行の像があったのである。

昨年2009年のトップニュースは、何と言っても「政権交代」だった。筆者の親しい人の中にも権力の座から滑り落ちた人が何人もいる。猿は木から落ちて猿だが、選挙で落ちた代議士は「只の人」。彼らが「薦を被る」ことを覚悟の上で政治を志したのかどうかは知らないが、落選の現実には甘受せねばなるまい。悲運の時こそ「野」にあって「経綸」を学び直す絶好のチャンスだ。再び赤絨毯を踏むときに鮮やかに「豹変」するために通らねばならない試練の門だ。正月の猿回しのように、猿の顔は違っても繰り出す芸が変わらないのでは意味が無い。だから、「年々や猿に着せたる猿の面」(芭蕉)。